名教スタッフ版 よめよめグランプリ

名前　手島　和男

日付
10月5日

ページ数
187ページ

★読んだ本について書いてみよう。

①本の題名　江戸の名所　お上り武士が見た華の都

②本の作者　田澤拓也　著

③私のおすすめの本を、紹介します。

書店で見つけました。「江戸は世界最大の観光都市だった」と書いてある本の帯が目に留まり、つい手にとっていました。題名にもあるとおり、この本は江戸の名所を訪れた地方の武士が、その様子を日記に書き残したものに当時の江戸の様子などの解説を交えながら紹介しているものです。

この日記を残したのは、藩主の参勤交代のお供をして江戸の大名屋敷で仕事をすることになった紀州藩の若い武士、酒井伴四郎彰常です。彼が江戸で仕事をしていたのは1860年。開国から6年、あの桜田門外の変があった年です。長い鎖国政策をやめ、港を開き、日本が騒然としていたと思われる時期です。日記にもそんな時代の緊張感が記されているのかと思って読み始めました。しかし、そんなことはほとんど書かれていないようで、もっぱら自分が見た名所の様子や感想、どこで飲み食いをしていくらお金を使ったかといったことばかりのようです。

彼の日記から、浅草を訪れた時の様子を紹介すると、

「（略）まず上野手前に手餅を喰い、それより浅草にて手前にてそばを喰う、それより医師の方にて治療いたし貰う、観音へ参詣、おばけの見せ物を見物いたし、そのところより少々タ立いたし、少し向かいにてあなこ・いも・蛸甘煮にて酒呑み、飯を喰う、それより吉原見物に行き、初めておいらん道中を見る、西瓜一切れ喰う、（略）」

とあります。医者がいて、多くの飲食店があり、見せ物小屋まであるにぎやかな様子が分かります。

幕府を倒そうと、刀を振りまわす血気に逸る若い武士たちがいる一方、こんなのんびりした武士もいる、私はここが面白いと思いました。幕末のイメージが少し変わりました。

江戸時代というとずいぶん昔のこと、という感じですが、テレビや映画では江戸時代を舞台にした「時代劇」が多く作られています（「江」や「大奥」もそうです）し、江戸の文化は今の生活の中に多く残っています。そんなことを思い出させ、遠くに感じていた江戸と自分をぐんと近づけてくれた本です。

小中学生向けに「歴史がよくわかる　江戸・東京の本」（河合敦　監修・著）という本があります。江戸と東京の今と昔が写真や絵を使って紹介されています。こちらも面白いですよ。

ぜひ、読んでみてください。